

冬の女

横光利一

青空文庫

女が一人籬を越してぼんやりと隣家の庭を眺めてゐる。庭には数輪の寒菊が地の上を這ひながら乱れてゐた。掃き寄せられた朽葉の下からは煙が空に昇つてゐる。

「何を考へていらつしやるんです。」と彼女に一言訊ねてみるが良い。

彼女は袖口を胸に重ねて、

「秋の歌。」

もし彼女がそのやうに答へたなら止めねばならぬ。静に彼女の手を曳いて、

「あなたは春の来るのを考へねばなりません。家へ歸つてお茶でもお煎れになつてはどうですか。春の着物の御用意はいかゞです。湯のしんくと沸き立つた銅壺の傍で縫物をして下さい。あなたの良人は間もなく手先を赤くして歸つて来るでせう。それまであなたは過ぎ去つた秋の物思ひに耽つてはいけません。秋には幸福がありません。さう家の中へ這入らうではありませんか。もし炭箱へ手を入れることがお嫌ひなら手袋を借しませう。水は冷めたくとも間もなく歸る良人の手先を考へておやりなさい。花々はまだ花屋の窓の中で凋んではをりません。暖炉の上の花瓶から埃りをとつて先づ一輪の水仙を差し給へ。縁の上では暖く日光が猫を眠らせ、小犬は明るい自分の影に戯れてゐる筈です。だが、あな

たはあの山茶花を見てはなりません。あの花はあれは淋しい。物置の影で黙然と咲きながら散つて行きます。あなたは快活に白い息をお吐きなさい。あの散り行く花卉に驚いて飛び立つ鳥のやうに。眼をくるくむいて白い大根^{だいこん}をかへて勝手元でお笑ひなさい。良人の持つて帰つた包からはあなたの新しいシヨールが飛び出るでせう。しかし、春は間もなく来るのです。手水鉢の柄杓の周囲で蜜蜂の羽音が聞えます。村から街へ登る車の数が日増しに増して参ります。百舌は遠い国へ歸つて行き、枯枝からは芽が生々と噴き出します。あなたは、愛人の手をとつて郊外を漫步する二人の若い人達を見るでせう。そのときあなたは良人の手をとつて、『まア、春が来ましたわ。ね、ね。』と云ひ給へ。だが、あなたの良人のスプリングコートは黴の匂ひがしてゐてはいけません。』

青空文庫情報

底本：「定本横光利一全集 第二巻」河出書房新社

1981（昭和56）年8月31日初版発行

底本の親本：「改造」

1924（大正13）年12月1日発行、第6巻第12号

初出：「改造」

1924（大正13）年12月1日発行、第6巻第12号

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧字、旧仮名の底本の表記を、新字旧仮名にあらためました。

※くの字点と踊り字「ゞ」は、底本のママとしました。

入力：高寺康仁

校正：松永正敏

2001年12月11日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

冬の女

横光利一

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>